

終末は性欲処理

「女の子のためのセックス」批評

春野たんぽぽ

総論

女の子はいつの間にか男の人に分類されている。性の対象として見える子、性の対象として見られない子、そして性の対象として見てはいけない子だ。大体の女の子が性の対象に見られるか見られないかで判断される。性の対象として見てはいけない子は希少だ。性の対象として見てはいけない子とは「汚してはいけない子」という意味だ。セックスが汚いとは言わないが、男の人の意識の中では自分の精液で汚してはいけないと思ってしまう女の子が確かにいる。それはアイドルだったり女優さんだったり大抵は手の届かない人が主かもしれないが、時としてそういう子が身近にいる場合もある。ちんすこうりなさんは性の対象として見える女の子だ。りなさんはセックスをきれいだとも汚いとも位置付けない。だが、セックスを「愛情」といったものとイコールのものだもしない。それはきっと自分がいつの間にか男の人の精液を受け入れる側の女の子だと気付いているからだろう。いつの間にか「愛」などなくてもセックスが出来るということを知っているからだろう。『ちんちん』という詩で表されたように「ちんちん、好きなんだね」と言ってもいい女の子であるのだ。この詩の中の「私」は別に「ちんちん」が好きなわけではないのに。だが、男の人の頭の中で決まってしまった役割は壊れない。「好きな人のだけ、好き」と言ったところで何かが変わるかと言えば男の人がその言葉に萎えるくらいだろう。この詩の中で表される「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子になることはない」のだと「私」が悟ったように役割を無理やり与えられてしまった時点で多くの女の子が「性の対象として見てはいけない女の子」にはなれない。

だが、それは不幸なことだろうか。誰かに一瞬でも「選ばれる」ことをりなさんは必死に求めているようにこの詩集を読んで感じた。「選ばれる」ことがたまたま「セックス」なのであって、誰とでもセックスがしたいわけではない。ただ「選んで」欲しいのだ。

しかし、最後の詩でりなさんは「選ばれる」ことも不要としているように感じた。何度も同じような行為を重ねてりなさんは「選ばれる」ということから自由になったのかもしれない。それが最後の詩の「あと100回負けたら／自由になれるよ」という言葉につながるのかもしれない。

どの女の子も生身なのだ。性の対象として見える子、見られない子、見てはいけない子もみんな「ひとりぼっち」なのだ。

この詩集を読んでセックスでは孤独を分け合うことが出来ないのだと感じた。だが、体温を感じ合うことは出来るのだとも思った。もし「選ばれる」と思える行為がセックスでなかったらりなさんはどんな風に世界を見るのだろうか。

各論

詩

この詩をはじめて読んだとき、私は詩の中の「わたし」はちんすこうりなさん自身なのと思った。だが、それはりなさんの意図からは外れているようだった。だけど、この詩を二回目に読んだときも私は「わたし」を「詩」であり「ちんすこうりな」さん自身だと思ってしまった。この詩集を読んでみて私が一番に感じたのは「潔さ」だった。そして「私を／傷つけることはできない」と言い切る強さがあるとも感じた。セックスという言葉や性的な言葉を多用しているのに、女々しさというか、じめじめ感がない。

「すべては暴力」と「わたし」が決めたとき、その「すべて」で私が一番に思いついたのは「優しさ」だった。ちんすこうりなさんは詩集の中で「愛情」を欲したりしないし、肯定も否定もしない。もしかしたら欲しているのかもしれないが「愛情」を欲しいとたくさん女の人が主張するようには欲したりしない。それは次に期待することが嫌だからではないだろうか。

始まりや終わり

「救われるかもしれない」と「泣いているのかもしれない」は誰に向けられた言葉なのだろうか。この詩の中で「私」は土下座しているサラリーマンを救おうとしている。でもそれは何故だろう。どうして「見ず知らずの男の涙」を「ほおに落」とされなければいけないのだろうか。それは「私」もまた救われたいからではないだろうか。「私」は見世物になっているサラリーマンに同情と言うにはあまりにも切実すぎる思いを持っているのではないだろうか。だから「可哀想」ではなく「悲しい光景」と表しているのではないだろうか。同類であるということと言おうとしているのではないだろうか。だからこそ最後の「少しだけいのる」はサラリーマンに共鳴した自分のための祈りでもあるのではないだろうか。

夢

この詩集の中には時々、赤ん坊が出て来る。それは性の延長線上に子どもが生まれるということを持ちんすこうりなさんがよく理解しているからではないだろうか。セックスは日常の特別なことではあっても非日常の特別なことではない。愛されることや愛することと同じように世間のどこにでもあることだ。だからちんすこうりなさんは愛を美化しないし、セックスを汚いともきれいとも言わない。セックスはどう位置づけようとどこにでもある行為であり、誰だってしようと思えば出来る行為である。そこに幻想を持つから落胆したりするのだ。処女は処女を失くしたからといって見える物が変わるわけではないし、童貞は童貞で、いつか気が合う優しい可愛い子ときれいなセックスで童貞を捨てる事が出来るとは限らない。だから童貞は風俗で捨てはしないのだろう。だが、セックスは結局、どこにでもある、誰でも出来る行為でしかない。日常の中にある性のひとつでしかない。セックスは選ばれた人が出来る行為ではない。「ひとしく降り注ぐ月のひかり」のように人を選ばなければ誰だって出来る行為なのだ。

ようこ

この詩集の中で「マンコ壊れた」という言葉が三回ほど出て来る。どう壊れたのかは分からないが、何となくその感覚は分かる。男性はきっと「ちんこ壊れた」とは言わないだろう。

「AV女優になるために／東京に行ったようこ」はきっといろんな人に反対されただろう。この詩集は人が善とすることと悪とすること、人が汚いとすることきれいとすることを否定するわけでもなく、そんなものが本当はどうでもいいと言うように当たり前に

倫理観を無視した言葉が出て来る。

親の借金を立て替えるためにAV女優になるのは美談で、なりたいからAV女優になるのは真っ先に反対されることだろう。ようこそそのどちらなのかは分からないが、ようこそは東京で「強くなりすぎた」のだろう。ようこそは地元をいたくなかったのだろう。それでも「帰りたい」ということは地元にいることをいつの間にか欲していたのだろう。「マンコ壊れた」はきっとようこそにとって帰って来た自分に一番ふさわしい言い訳だったのだろう。ようこそは「可哀想な人に／微笑むようにするのが上手くな」った分、きっと自分に厳しかったから世間から下品だと思われるかもしれない言葉を使って言い訳にしたのだろう。

最後の質問

「好き」ということを「私」は「楽しめないし続けられません」と言う。「私」は「好き」という執着心から卒業したのだろうか。題名の『最後の質問』は「愛情」に依存しないようにすることを意味しているのだろうか。「私」は「好き」という感情から卒業したのだろうか。

Swissotel

この詩の中で「完璧」という言葉は使われても「見えているものと見えないものすべてのせたシーソーがつりあっている」とは書かれていても「好き」や「愛」といった言葉は出て来ない。「完璧」という言葉の中に「好き」や「愛」が含まれているとも私は思わなかった。なぜなら、どんな「完璧」な夜を得ても明け方になれば「隣の人の寝息を置いて、そっと窓際に行」ってしまうのだから。それは満たされたからだろう。だが、満たされることと愛情は違う気がする。

ロマンチック・メモ

この詩の中には「好き」という言葉が出て来る。だが、それは「わたし」に対する言葉だ。対象とされるのは「あなた」ではない。詩の中で「わたし」は相手に対しても自分を好きになって欲しいと望むことがない。

片隅

「しては／いけないことを／するのが／好き」とこの詩には書かれている。それは「しては／いけないこと」を一緒にする相手が好きなわけではなく「しては／いけないこと」をするのが好きなのである。この「しては／いけないこと」を私はセックスだと思った。だからと言ってセックスが好きだと言っているわけではないと思う。この詩で言い表したいことは「しては／いけないこと」をするのが好きだということであって限定される行為が好きなのではない。「しては／いけないこと」であるから、好きなのだ。だからきっと限定される行為が「しては／いけないこと」でなくなったらきっと興味は薄れていくだろう。

女の穴

「勃起した男性器を／穴に入れて／こすると気持ちがいい／ただそれだけのことだ」と言っただけでも「とりあえずあなたとしてみたい」と最後にはセックスへの興味のような物を持っている。興味というと間違っている気もするが「愛し合っていると喜んでさ」と嘲りながらもセックスを欲している。それはセックスを欲しているというよりはその行為がセックスだけの物から何か別の物に変わることを望んでいるのだろうか。「他の人間たちががしているように／してみたい」のは「他の人間たち」が錯覚しているように「穴に入れ」るだけの行為に何らかの意味を持たせたいからだろうか。

「穴がどこに続いているのか／思い出して」とあることから、やはりちんすこうりな

さんはセックスがセックスだけの行為でないことを嫌になるほど理解している気がした。私はこの二行を読んで、セックスが『夢』に出て来た「赤ん坊」に続いているということをお願いなのと思った。自分が出てきた穴、自分が生み出すかもしれない穴。生まれるということがうれしいことなのか、つらいことなのか分からないがそのことを考えると「体から涙があふれ」るのだ。

恋文

この詩集の中でちんすこうりなさんはたびたび「嘘」を否定する。人間は状況や自分を良く見せたいからといった理由などで嘘をつく。それは相手を気遣った優しい嘘とするときもある。「嫌われたくなくて」つく嘘はもしかしたら優しい嘘かもしれない。だが、ちんすこうりなさんはそれさえも否定する。ちんすこうりなさんも確かに嘘をついてきた人だ。でもそれをやめたいと言っている。そして「まともにな」ったら「きみに会いたい」と「恋文」にしたためている。そこには『最後の質問』で「卒業」した素直な気持ちが表されているのではないだろうか。この詩は男女関係のことではないかもしれないが、嘘をつかなくなった自分でなくては「きみ」に会えない。そこには誠実さが息づいている気がする。

さみしさ

この詩の中の「わたし」も「swissotel」の「私」も満たされた気分になると窓から外を見ている。これはちんすこうりなさんも同じなのだろうか。ここには『最後の質問』で封印された「好き」や「愛」などといった感情を「ことば」に出来ないから指をくわえて何も言わずにひとりであるのだろう。「ことば」を知っていても「言葉」に出来ないこともある。「子供はことばを知らない／指をくわえて／暗闇の中／感情を見つめる」とあるように「わたし」もまた「暗闇の中／感情をみつめ」るためにひとりで「大人のわたし」も「指をくわえ」ているのだろう。

バイバイ

「想いあう」気持ちの中にはきっと「愛情」は含まれているようで含まれてはいないのであると思う。それは「同じように並んだ女の子の中から、／選ばれ」ることが好きなのであり「たくさんのホテルの中の一つに／入るまでの時間が／一番好き」であり「ホテルを出て／バイバイする時が／二番目に好き」であるからだ。そこには相手を好きだと想う気持ちはない。相手が好きなのではなく「選んでくれた」から相手を想うのである。そこに相手への「愛情」はない。だからこそ「もう会うことのない」と言い切れるのだ。「一度体を重ねた」という事実があっても、その後に発展しないのだ。愛情がないからこそ「相手の幸せを／その瞬間／優しい気持ちで祈」れるのだ。

そこにはなにもない

ちんすこうりなさんの目から世界を見ると、世間から見れば汚いとされるものさえ愛らしく見えてくる。みんなが見たくないと目を閉じたり、罪だと罰したりするものを見せて、これが普通なのだと、これが日常なのだと肯定しているように思える。汚れたとされるものにも可愛らしさはあって、人間誰でも持っているのだと。それは「パンプスをだらしなく履いた／女が／男に何か渡してる」といった不穏さや「主婦が／風俗誌の求人を見てる」などの欲望のすれ違いなどから読み取れる。ちんすこうりなさんは「そこにはなにもない」ことを知っている。『始まりや終わり』で表される土下座しているサラリーマンと体を重ねることを想像することも『swissotel』で満たされる完璧な相手と体を重ねることも「セックス」という行為に分類されて、それ以上でもそれ以下でもないことを表しつつ「愛」というものを受け入れない。それは「セックス」が確かに特別な行為でありながら、結局は日常の延長線上のものでしかないことを表しているから

のように思える。結局生きている私達の欲求から来る当然の行為。そこに「愛情」などという物を求めることがおかしいことだと思っているから、ちんすこうりなさんは「セックス」に「愛情」を求めないのではないだろうか。もしかしたら、求めないどころか欲しいとも思っていないのではないだろうか。

「セックス」という行為は汚くも美しくもない平凡な日常の延長線上の特別な行為ではあっても、非日常の特別な行為ではない。欲望と欲望にたまに感情が混ざったどこにでもある行為なのだ。

理由

「もしも／あなたの余命が／あと半年だったとしたら」という「理由」がない限り「会いに行」かないということ。そして「あなたの余命が／あと半年」でない限り「ちんこを／入れに行」かないということだ。「今」会いに行かないのは、行く必要がないからだろう。だが、会いたくないわけではない。だからこそ「あなたの余命が／あと半年だった」ら会いに行くと言っているのだ。ではなぜ「半年」という時間制限がなければ会いに行かないのか。それはきっと「もしも／あなたの余命が／あと半年だった」らという「理由」がなければ「ちんこを／入れに行」けないからだろう。他の「理由」では会いに行くほどの「理由」にならないから、会いに行かないのだろう。ここで言う「ちんこを／入れ」という行為に性欲処理といった「理由」や子孫を残すといったような「理由」は存在しない。性欲処理のための行為だったらわざわざ「余命が／あと半年」の人間に会いに行くことはないだろう。ここで表される「理由」が一番この詩集の中で「セックス」を「純粹」な行為とさせるものかもしれない。

死

「嬉しいのか哀しいのかなんなのか」とは生まれたときの感情である。「雨は上がり／世界に虹色がさす／生けるものすべてへの祝福」をされていて「わたしもその一部である」のに「嬉しいのか哀しいのか」分からないのである。生きていることは「幸せ」だと世間はしようとする。だが、生きていることは本当に幸せなことなのだろうか。「蜘蛛の糸のように」広がる「選択肢」が合っているのかも、分からない。そもそも何が正解かは指し示されていない。だが「糸は煌め」いている。「安らかなれ」と言われると私は「死」をイメージする。私達は「死」を目指して歩いている。もしかしたら「死」へと続く「糸」が煌めいているのかもしれない。

雨

『そこにはなにもない』で書かれているように「嘘をつく」とは「わたしとあなた以外のものから」守ることである。「嘘」を重ねて他人を排除した「二人」は「雨に降られても当然だった」のだろう。「死」で語られるように「雨」が上がった瞬間「生けるものすべてへの祝福」がされる。だから「雨に降られ」た二人はきっとちんすこうりなさんの中で罪人のような立ち位置にいるのであろう。『恋文』でちんすこうりなさんは「嘘をつきたくない」と述べている。だが、この「雨」の中では「嘘」を重ねてまで守りたい関係がある。「守るものなんかないふりをして」この詩の中の「私」は「守る」ということを「すごくほしい／すごくあげたい」のである。そこには「感情」がある。そしてこの「雨」の中で「愛してる」という言葉が顔を出す。「ただ体温をわけあうこと」で「このうえなく満たされて」いるのである。

東京

「雨」で語られた「嘘の上で成り立った愛情」は「東京」で破壊される。「私」はどうしても「嘘をついて手に入れたかった／一時のしあわせ」を許すことが出来なかった。『恋文』で語られたように「私」は誰も「裏切りたくない」のである。「嘘」で

「守った」ものを認めることが出来なかったのだ。

螺旋階段

「東京」で消え去った「愛情」で「これからもずっと／ひとり」であることを「私」は再確認したのだろうか。私達はみんな「ひとり」だ。「二人」や「三人」になったからと言って「ひとり」から解放されたわけではない。数えられるようになっただけなのだ。「雨」で「私」は誰かを守るために生きようとした。だが、そこでも「嘘」をつき続けることに耐え切れなかった。そういった中で「私」は自分が「ずっと」ひとりであることにまた気付いたのだろう。

射精

「満ち足り」たときに「うれしいです」と言えば「ごめん」と謝られるのはなぜだろう。それは「射精した瞬間愛情の一部」が「流れていく」からだろうか。「満ち足り」ることと「愛情」は同じことだろうか。「愛情」が流れ出てしまったから「あなた」は「ごめん」と言ったのだろうか。だが、ここで表される「あなたの横顔は哀しそう」よりも「男のひとの横顔は／もう手の届かないところ」の方がずっと「哀しそうだ」。それはどうしてか。それを「愛情」をもらえなかったからと私は解釈出来なかった。「愛情」をもらえなかったから「哀しい」のではなく、選ばれなかったから「哀しい」のではないだろうか。『射精』以前で「私」は「ひとり」であることを確認している。

ちんちん

セックスそのものの行為が本当にどうしようもなく好きな女性はきっとこの世界の十分の一もいない気がする。だから「ちんちん、好きなんだね」と言った「あの人」はきっと「私」がその十分の一の女性であることを望んだのだろう。それはセックスが好きなだけの女性であれば後々「責任」を取らなくてもいいからだ。この詩の中でも「好き」は封印されてしまう。「私」は「言おうとし」て言えずに「うん」とだけ返す。それはきっと「あの人」が自分に求めている「役割」が分かってしまったからだろう。

次にどうして「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子になることはない」のだろうか。それはきっと「あの人」に「役割」を与えられ「女」として生きていく道しかなかったからだろう。「たった一人の女の子になることはない」のであって「出来ない」のではない。自分から辞退するのである。私はそこで「父親」を思い出した。「父親」が「私」を「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子」から「脱落」させるのではなく「女の子」というものから辞退した「私」だから「たった一人の女の子」には「なれない」のだ。

おっぱふ

「セックス」という行為以外で「ふうかちゃん」は選ばれた。そこには求めていないかもしれないが「愛情」のようなものがあつた。それは男女関係のことではないかもしれない。だが「あのとき」があつたから「ふうかちゃん」は「死ぬまで忘れない」ことが出来るのだ。たぶん「田中さん」に「抱きしめて」もらわなくても「ふうかちゃん」は生きていられただろう。でも「泣き出した」ことも「おっぱふ」で働いていたことも「忘れない過去」になっていたかもしれない。「田中さん」が抱きしめてくれたから「ふうかちゃん」は「田中さん」に「奇跡的にばったり会うこと」を想像するのだろう。そして「あのとき」の関係のままでいたいから「ありがとう」とは言わず「ははは」と笑うのだろう。

音楽

「退屈な風が吹いて／ばたばたと投身自殺」したにも関わらずまた「塵とりでかき集め」られて「窓から放」られて「五線譜の風によって／お終いの音楽」をまた奏でさせ

られる。「音符は無表情な顔をして」いるけれどいつも「風」に操られている。それはまるで「音符」に意志がないように見える。だが「音符」自身は嫌々風に従っているのではなく、敢えて何の意志も持たないようにしているのではないだろうか。「お終いの音楽」を奏でるために「風」に操られるふりをしていたのだ。

うみべの女の子

『螺旋階段』で「わたし」は「ひとり」であることに気付き、他人が「誰のものにもできない」ことを知った。「わたし」は「世界に二人だけしか存在しない瞬間」が「ずっと続」かないことも分かっている。だからこそいつかの別れに気付いていて「思い出にはなれるよ」と言う。「一緒に笑ったことを／ずっと覚えているよ」と「思い出」は残ることを表している。

愛子ちゃん

「嘘のない世界に行きたいと願い続けた愛子ちゃん」はちんすこうりなさんの過去の姿のように感じる。「嘘はついてもいいけど欺いたり騙したりするのはよくないんだ誰かを喜ばせたり 誰かを傷つけないための嘘もあるから」と「わたし」は言うけれど、そういった嘘も許せなかったのは作者自身だ。だから「同じだよ！」と叫んだ愛子ちゃんを私は作者の過去に重ねてしまった。そして「嘘のない世界に行ったら／もっと優しくくないよ」と言う「わたし」は自分にそう言い聞かせているのではないだろうか。そして「愛子ちゃん、／やっぱり／1分とか1時間で／じゅうぶんだよ」と愛子ちゃんにではなく、自分に言い聞かせるのは「優しい嘘」さえも許さないでいると苦しくなるのを知ってしまったからではないだろうか。

そんな終わり

『うみべの女の子』で作者は「思い出にはなれるよ」と述べていた。

『そんな終わり』ではマンガを返し合うという行為をするくらい仲がまだ良いのに破綻してしまった二人がいる。『そんな終わり』でその二人は会話を交わしながら、もう二人が元に戻らないこと、戻る気もないことを交換しているようだ。きっと「読み返しながらか／一冊一冊／ていねいに戻していった」時点で二人の関係は忘れられる。「思い出」にもならない二人の関係は残酷だ。

山手線

この詩は、別れた恋人への長い手紙のようだ。手紙というよりは弔辞なのかもしれない。「あなたとはああいうことをした」ということや「あなたはこういう人だった」と述べているようだから。別れた恋人への手紙のようだと言ったのは「わたし」はこの詩を懐かしんで書いているように感じたからだ。そしてこの詩が手紙だとして、この手紙は返事を欲しない手紙だ。もう別れて何年も経つ恋人を何となく懐かしく思い、手紙を書いた。相手の気持ちは考えずに。この手紙をもらった人がどう受け取るのかも気にしていない。破り捨てられようと読んで泣かれようと、手紙を書いた本人にはどうでもいいのだ。ただ、自分が懐かしむためだけに書いたのだから。

I Love PAPA

「ずっと恋してる」と作者が明確に表示するのはこの詩だけだ。「好き」と表現したことはあっても「恋」という形で表されては来なかった。『ちんちん』で「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子になることはないんだ」と作者がなれないと悟ったのはこの詩での「恋」から来ているのではないだろうか。『ちんちん』で私が「父親」を連想したのは『I Love PAPA』を読んでいたからだった。他人から「本当に大切に守ってあげたい／たったひとりの女の子」だと思われることはないと感じ

ている。だからこの詩の中で「ずっと恋してる」と表現されたとき私は『ちんちん』の中のことを思い出した。それはつまり、自分を性の対象として見ない父親からすれば自分は清いということだ。だが、実際は違う。なぜならちんこをくわえて、穴にちんこを入れられているのだから。どんなに心が清らかでも自分はすでに父親が母親を性の対象として見たときのように「女」という役割を担っている。父親の前でそういったことを話せるだろうか。そう考えたときから女の子は父親のための「たった一人の女の子」を辞退するのではないだろうかと考えた。

官益方面は知らない

「飛んでも一人（飛ばなくても一人）」とまた「一人」であることを断言している。

「えびきゅりあん」である女性を望みながら否定する男達。「渋谷駅から股が割れて尿が流れる」とは線路のことだろう。この詩の中で「もう何が本当で何が嘘か考えるのやめた」と作者は思考を放棄した。だが、本当は思考を放棄したわけではない。「東京」という得体の知れない場所のごちゃごちゃした感じを詩が体現しているのだ。

ふたり

「好き」という気持ちが徐々に表れはじめる。作者は最初「愛情」や「好き」という感情を求めてさえいないと思っていたが、次第に体を重ねるという行為に「選ばれる」以外の何かが生まれて来る。ではその「何か」とは何か。それを「すき」という感情だけで表すのは少し乱暴な気がする。この詩の中で「ふたり」は「体温」を分け合っている。「耳をすませて」いるのに「なにも聞いてなかった」。それは「すきという気持ちだけ」を真剣に感じ取ろうとしているからだ。だが、そこから欲望が消えたわけでもない。だからと言って欲望だけでもない。「ふたり」は「過ぎていく時間」に気付きながら体温を分け合おうとしているのだ。体を重ねるということは相手に欲情しているということであって「すき」以外の気持ちでも出来るときがある。欲情だけのとき「時間」は気にしないだろう。ここでは「過ぎていく時間」を「感じていた」とある。「ふたり」は「過ぎていく時間」の中でお互いの体温を切実に伝え合おうとしていたのだ。

石を積む

「積んでは崩れ／崩されたり／崩したり／しながら／積み方を覚え／積み上げた」ものを「ひとつひとつ／投げ」ていく。そして「泣きながら／投げ方を覚え／できるだけ遠くに／投げた」。この詩の中ではまず「積む」ことを覚える。そして妨害を受けたり妨害されたりしながら、その「積み方を覚え／積み上げ」ることまでしている。それなのにそれを「投げ」ていくのはなぜか。それは「積み上げ」ることを諦めたからだろう。諦めたというより、積み上げることに意味を見いだせなくなったのかもしれない。そして今度は「投げ方を覚え／できるだけ遠くに／投げ」ようとする。きっと「石」は必要でなくなり、むしろ「できるだけ遠くに／投げ」ることの方が大事になったのだろう。この詩集を読む限り、作者は自分の中で意味を見いだせなかったり、納得出来ないものは、それを他人がどれほど重要だと言っても捨てていくように見える。それがどんなに幸せにつながっていようとも自分の何かに反するものは捨てていく。納得出来ないものはいつか破棄していく。だからこの詩の中で「石」は「積み上げ」ることよりも「できるだけ遠くに／投げた」ことの方が作者にとって意味のあることなのだろう。

底

この詩集を読んで一番に感じたことは作者の誠実さだった。確かに破天荒だが、決して間違ったことはしていない。この詩の中でも「じぶんがいちばん／よく知っているばしょ」で「たくさんの穴の中に／埋めた食べ物」が「いい具合に腐」ればその「たべものの／気持ちを考えながら／食べ」ていく。「くるし」くなっても「全部食べ」ようと

する。「死ぬかもしれない」のにそれさえ「ほんもうだ」としている。それを「上の方で／突き落としたじぶんが／ばかと言った」のはあまりにも不器用にしか生きられない自分を責めたのではないだろうか。嘘さえ突き通せない「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子になることはない」のだと気付いてしまうような誠実さがあるから自分の中で「いい具合に腐った」ものを「食べ」尽くすことしか出来ないのではないだろうか。だが、この詩で作者はそういった不器用な誠実さを言い表したいのではない。「じぶん」を本当に「ばか」だと思っているのだ。作者は自由奔放に生きているようだがんじがらめなのだ。

おしまいの日

「私」はきっと性の対象として見られなくなることを望みながら「お疲れ様」と言われる日を恐れている。「祝福だ」としながら「幸せねえと呟」きながらそれが本当の幸せだとは思っていない。「おしゃれをやめ／笑顔をやめ／エアロビをやめ／陰毛を整えるのをやめ／アンアンの特集を読むのをやめ／ほとんどのことをやめる」のは楽だ。それこそ「お祝いだ」。だが「私には性器しかない」と思っている人物にとって「勃起し」ていた「ちんこ」が「ゆっくりと頭を垂れるように／完全に／地を向いた」としたらそれは「幸せ」だろうか。だからこそ「私」は「幸せねえと呟」いても「食べながら泣」いているのではないだろうか。

ちひろ／山手線

「体と体の間に言葉が溢れて口に出したそばから嘘にして／近づけないようにしてしまふ」とある。『そこにはなにもない』で作者は「嘘について考えてる／嘘をつくとは／支配することだ／支配するとは／守ることだ／誰から／わたしとあなた以外のものから」としている。作者は嘘をつき続けることを拒んできた。「東京」では「もう私 嘘をつかなくていいんだ、という安堵」さえ持っている。どうしてここまで作者は「嘘」というものを拒むのか謎だった。確かに「嘘」を汚いとする考えも社会にはある。だが私には作者は「嘘」が嫌いというよりは「嘘」を恐れているように思っていた。この詩の中でその疑問が解けたようだ。作者は他人を「近づけないようにして」「わたしとあなた以外のものから」「守」ろうとすること自体を「悪」としていたのではないだろうか。だからこそそんなことをしてまで守らなければいけない「愛」をいらぬものとしてきたのではないだろうか。

この詩は題名にもあるように「山手線」という詩とつながっているのだと思う。「わたし」は「ちひろ／山手線」の世界を「ささやかな幸せ」だとしている。だが、これが幸せだろうか。旦那は「不倫相手の子供の名前は死ぬほど可愛くて」とあるように不倫しているのだ。そして何の意識もなく「子供の名前」を不倫相手に教えて不倫相手はそれを「死ぬほど可愛くて／だめだーって思っ」ているのだ。そんな世界は果たして真っ当だろうか。私から見れば地獄絵図だ。何が幸せなのだろうかと思う。だが、作者が本当にこれを幸せだと思っているとも思えない。なぜなら「わたし」が「誰かに聞いてほしい」「ささやかな幸せ」はそれぞれの「嘘」で成り立ったものだからだ。これほど「嘘」を拒む作者がこの世界を本当の「幸せ」だとするとも思えない。だからきっと「わたし」が「家族を持」ったとき、自分も同じ目に合うことを覚悟しているのではないだろうか。

地元に一軒しかないソープラントで№2 だった私の親友

この詩は「セックス」で自分は選ばれている、必要とされている、と思っていた女の子が選んだひとつの道だろう。「あんなに寂しかった」のも「手帳の予定が空欄だ」と「焦った」のもみんな一緒だ。そういった時期を過ごすときがある。だが「愛に飢えて」いると告白する人も少ないし、「愛に飢えて」いるのだと知って誰かが愛してくれ

る確率も低い。そして「使い捨てカイロと同じ」とまで自分が「必要ではない存在」だと思ってしまう人も珍しい。みんな寂しくて愛に飢えているけれどそれを口には出さないし、行動もしない。行動して「セックス」という一応の解決口を見つけた人は正直で、世間で言う「体を大事にする」という（私にもよく分からない）ことが出来ない人なのだ。だから「この親友」は「愛に飢え」ないように子供を育てるだろうし、自分自身ももう「愛に飢え」ることはない。どれだけ愛してもそれが悪いことになることのない「もの」を見つけたのだから。

スマホのメモ欄

スマホのカレンダーにその日あったことを書いているようだ。だが、それはあったことだけがただ書かれているわけではない。「なんて思っただろう／生理中なのにやる女、みんなにしてるんだろ、のこのこ部屋に来て、すぐにくわえる、ビッチ」といった相手が思っているかもしれないことへの想像や「私がなにか言うと全部嘘っぽい／しらじらしくて嫌になる」という感情を吐き出し自分を責めたりもしている。そしてそれは「私はもう二度と誰かに本当に大切にされることはない／たったひとりの女の子にはなれない」というような自己否定につながる。この詩の中で「私」は所々で自分を責めている。「チンクルチンクルチンクルホイ。ハメた人数一ケタにもどーれ」もそのひとつだろう。そしてこの詩の中で「私」は「あなたの思い出になりたい／あなたの歴史に残りたい」や「私がいなくなったら、寂しい？」といった言葉などで自分の存在を確認しようとしている。自分が選ばれているのか確認しようとしている。

「私はあなたの何を覚えていたいか」と「私」が語るように「私」からしてみれば「あなた」との思い出はどれを覚えていたいか数えられるほどあるのだ。だが「あなた」の思い出はどうだろう。「動画を撮った／外出しセックス、二回／これはAVだなあ」というような性につながる思い出しかない。「そんなことをしてあなたの記憶に残ろうとしてしまう」とあるようにそういったことしか「あなた」は記憶に残そうとしない。

だが「あなた」は覚えておこうともしている。「覚えておかなきゃ。と言って／暗がりで見つめるあなたの目は／いつも悲しみを帯びている」ともある。「悲しい」と思ったのは、もしかしたら「私」ではなく「あなた」だったのかもしれない。「たった一人の女の子にはなれない」のではなく「たった一人の人」を作ろうとしないのは「私」なのかもしれない。

夜明け前に

「昨日の空気をパジャマにはらませて／ぬるい指でなぞる／音のない／窓の向こう側の景色」と詩の中で「私」が窓の外をひとりで見つめているときはいつも満たされたときだった。最終連で「あなたの寝顔を想像しては／安らかであってほしいと思う／夜明け前」とあるようにやはり「私」は満たされているのだ。

「約束なんていらない／契約もいらない／義務も責任もいらない／いらないそんな優しさ／私がある／あなたが私を欲しがらぶんだだけ／一緒に生きて」とある。「欲しがらぶ」が性的な意味だけとは思わない。「私」はいつか相手が自分を「欲しがらなくなる」日が来ることを知っている。だが、それまでの間はそばにいたいと願っている。それは「あなた」が自分を満たしてくれる人だからだ。

無題

「私は／誰のものにも／ならない／ていうか／なれない／かわりに／誰も／私のものに／ならない」というのは『ちんちん』という詩の中で表された「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子になることはない」ということにつながっているのだろう。「私は／誰のものにも／ならない／ていうか／なれない」というのは諦めから来て

いるのだろうか。「さみしい」のだ。「楽しすぎ」る「今」を「一瞬が永遠」という「陳腐な言葉」で表しても「涙」は「止まらない」。「ずっと／このまま／こんなふうなのかな／このまま／ずっと」というのはこれほどまでに変わっていくお互いなのに理解し合えないことは「ずっと」続いていくことを表している。「あなた以外の人」に理解されても意味がない。「あなた以外の人」が分かってくれても「何を／したいのか」分からなくなる。「私」はあなたとの関係性を変えたいのだ。理解し合いたいのだ。

いずみさん

この詩の中で「わたし」は蔑ろにされたいのだろう。「愛」もないのに大切にされることを受け入れたくないのだ。だからこそ「モノみたいに扱われるセックスが／よくて」と言い自分を「モノ」のように扱うくせに娘の「車椅子を押してた」あの人を「ますます好きだと思」うのだ。それでいいのだ。なぜなら「あの人」と「あの人によく似た女の子」の間には「愛」があり、大事にされることが当たり前だから。「わたし」と「いずみさん」の間には「愛」はない。だから蔑ろにされたいのだ。そうして「わたし」は「愛がないならお金をとらなきゃ」と「千円でいい」と「モノ」の自分を売りたいのだ。最低なことをされたいのだ。

おっぱふ2

「すり減らしながら／すり減らされながら／元通りになることはな」い何かを「女の子たちは」はさらしている。「白いおしぼりでおっぱいをそっとぬぐって」「神聖なおっぱい」と言い聞かせ「これは自分のおっぱいなのだから／どう使ってもよいのだ」と納得させている。「お母さん」は「自分のおっぱい」を使ってきっと誰かを養っているのだろう。ぬぐわないといけない。「かつかつという音」を「ごまかしながら歩いて行」かないといけない。「おっぱふ」は「いつのまにか膨らんで／価値を存分に発揮するおっぱい」を利用する場所だ。「神聖なおっぱい」だから「なにか」をぬぐわないといけない。それを付けたままでは「自分のおっぱい」として戻ってこない。

見えないちんこ

「わたし」はこの詩集を通して相手を乱暴に扱わない。それは「見えないちんこ」が指示するのだろうか。「わたし」からは相手の男性に対する慈愛のようなものが見える。それは「わたし」が女性だから力の関係上「乱暴」に扱えないということもあるかもしれない。だが、この詩集の中で「わたし」は言葉でも誰かを「乱暴」に扱わない。そこには「優しさ」がある。

ふたりで

「私」にとって「先輩」は「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子」なのではないだろうか。そして「私」にとって「先輩」は「夢」だったのではないかとも考えた。それは「先輩」が実在しているとかいないとかそういう問題ではなく「私」は「先輩」に「夢をみ」ていたのだと思う。「先輩」は「私」に「愛されること」で「私」の「夢の一部」になろうとした。そして「私」は「先輩」を「愛する」ことで「先輩」が「本当に大切に守ってあげたい／たった一人の女の子」であると「夢」を見せていたのではないだろうか。

一番幸せだった時

「私」は「襲われた」ときに「恐ろしいほどの幸福感に満ちていた」のだろうか。私は「私」が「一番幸せだった時」は「時が流れ」て「ひとりぼっちで／立ち尽くして／生きていくことに／泣きそうになりながら」しているときに「一番幸せだ」と感じたのだと思った。

「純粹で無邪気な性欲」を「私」はいつも求めているようにもこの詩集を読んでいて

感じる 때가多々あった。だがこの詩が表わしたいのは「純粹で無邪気な性欲」を「嫌じゃないな」と思いながら「可愛らしい」とさえ思いながらも、それまでであることに気付いたのではないだろうか。「夢と／現実の間に起こったこと」でしかなかったのではないだろうか。「ひとりぼっちで／立ち尽くして」誰にも自分が「必要だ」と認めてもらえなくても「ひとりぼっちで／立ち尽くしている」ことに意味があると思ったのではないだろうか。

女の子のためのセックス

「彼女は自由／自分のためのセックスをしているから／それから孤独／自分のためのセックスをしているから」は私には諦めのように感じた。「忘れられたようについた／ちっぽけな血で／つながれている／愛のしるし」はシーツを洗濯すれば消えてしまうし「あと100回負け」てもきっと「自由にな」れない。誰かのために生きてもいつか裏切られる。特に男女関係ほど脆いものはないだろう。だから、この詩の中でちんすこうりなさんは誰かのためにしてきた性行為を自分で最後に否定しているように感じた。「誰かのため」に何かをしても何かが返ってくることはない。むしろ何かを求めてはいけないのかもしれない。「女の子のためのセックス」は存在しないのだ。

まとめ

合コンをしたときに男の人に「二人で違うところで飲もう」と言われるとうれしい。その人が気に入っている人なら尚更うれしい。「同じように並んだ女の子の中から／選ばれ」るのは気持ちがいい。だが、そこに「愛情」が存在するかと問われれば「愛情」が最初からあることなどない。「愛情」はセックスから生まれるわけではない。セックスから生まれるのは「親近感」だ。多くの人がある「親近感」を「愛情」と間違えるのだ。心がつながっていたらセックスは不要だとする意見もある。だが、本当にそうだろうか。ただ単に相手を「性の対象」として見られなくなっただけではないだろうか。そこから「愛情」が消えたとも思わないが「性の対象」として見られなくなっただけのことを「真の愛」に辿りついたとするのもおかしいものである。あんなに相手を求めたのだから。セックスが「愛」を確かめる行為だとも思わない。だが相手にふれず「体温」を確かめることもしなくなったとき、それを「真実の愛」だと錯覚する傲慢さも私は許せない。セックス＝愛ではない。だが、この詩集の中でちんすこうりなさんは切実に誰かに必要とされることを望んでいるように感じた。それがたまたまりなさんにとってセックスだった。一体「愛」はどこにあるのだろう。「本当の愛」なんてものは結局勘違いなのかもしれない。